

Title	テキストを語る：『基礎ゼミ：メディアスタディーズ』
Author	石田, 佐恵子
Citation	大阪市立大学大学教育. 18 巻 2 号, p.78-79.
Issue Date	2021-04-30
ISSN	1349-2152
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	テキスト:石田佐恵子・岡井崇之(編)『基礎ゼミメディアスタディーズ』 世界思想社、2020年：科目名:メディアの社会学：担当教員:石田佐恵子 (文学研究科)：特記事項:令和2年度大阪市立大学教育後援会「優秀テキスト賞」受賞
DOI	10.24544/ocu.20210617-002

Placed on: Osaka City University

＝テキストを語る Textbook Review＝

テキスト：石田佐恵子・岡井崇之（編）『基礎ゼミ メディアスタディーズ』世界思想社、2020年

科目名：メディアの社会学

担当教員：石田佐恵子（文学研究科）

特記事項：令和2年度大阪市立大学教育後援会「優秀テキスト賞」受賞

【刊行のきっかけ】

本書の出版元（世界思想社）では、2017年から「シリーズ〈基礎ゼミ〉」を刊行してきた。既刊分野は、『基礎ゼミ 社会学』（2017年）、『基礎ゼミ 宗教学』（2017年）、『基礎ゼミ 政治学』（2019年）となっており、本書『基礎ゼミ メディアスタディーズ』は〈基礎ゼミ〉シリーズの4冊目にあたる。

出版社の企画書によると、〈基礎ゼミ〉シリーズは、その名の通り「ワークを通じて学ぶことのできる、大学1・2年生用のテキスト」である。その特色としては、「章ごとに、個人ワークやグループワークを取り入れ、ワークシートに書き込むことを通じて、その分野の知識に触れると同時に、グループディスカッションやレポート執筆に対応できる力を養うテキストを目指す」とされている。

本書刊行のきっかけは、世界思想社〈基礎ゼミ〉シリーズの担当編集者から、以前から同社で教科書を刊行してきた岡井崇之さん（奈良県立大学）に編者候補として打診があり、その岡井さんから石田に共同編集者として声がかかった、という経緯である。本書の執筆前には、岡井さんとは学会等で顔を合わせる程度のつきあいだったが、石田の関心領域を評価していただき、共編著にお誘いいただいたことはたいへんうれしく思った。

そのような経緯で本書の企画が立てられ、第一歩を踏み出したのだが、実は当初は、若く優秀な編集者と熱意溢れる岡井さんにどんどん進めていただいて、私はサポート役に徹すれば良い、というような、やや気楽な気持ちでいたのである。

だが、編集者と共編者の3人で長時間に渡る熱心な企画会議を重ね、本書の輪郭が立ち上がってくるにつれて、企画編集そのものが楽しみになり、私自身もどんだんのめり込んでいくようになった。一般的に、書籍の執筆・編集作業は山あり谷ありで、楽しいばかりの作業とはほど遠く、時には苦行にもなりうるものだ。ところが、本書の場合は、自分でも意外なほど作業すべてのプロセスを大いに楽しめた。

【企画会議と執筆依頼、研究会の開催】

本書の章構成や主題を考えていくにあたり、各章のタイトルを、学生が関心を持ち理解しやすい「疑問文」の形に統一することになった。これには、私自身が本学の授業で『基礎ゼミ 社会学』を採用し、教員としてこのシリーズの読者・使用者であったことが大きく影響している。『基礎ゼミ 社会学』の中にも「メディア」に関する章があり、学生には人気がある章だったが、そのときに出された疑問や論点が大いに参考になった。これらの「疑問文」の案をどのように表現し、グループに分け、どのような順番に並べるか、について、企画会議でさまざまな案を検討し、何度も修正を施した。各章の具体的な執筆担当者を想定しながら考えていくのだが、どのようなテーマが不可欠で、どのようなテーマは新しいのか、大いに議論しながら取捨選択を進めていった。

ようやく各章の主題（疑問文）が決まり、そのテーマを執筆する実力を持った中堅研究者を候補に挙げて、執筆依頼をかけていった。このとき特に苦労したのは、さまざまな出版社から出されている類書・既刊本との差異化である。あるテーマで手堅く研究を進めている執筆者には、関連主題での執筆依頼が重複することがあり、結果として、同じような書き手が並んでいる類書が生み出される。これだと、読者としては少しつまらない。本書では、実力があり魅力に溢れる執筆陣に、各章の執筆を引き受けていただくことに特に尽力した。

執筆の仮約束を取り付けた後で、各章の主題・キーワード・参考文献の重複や、ワークシート案の難易度などを調整するために、出席可能な執筆者を集めて、研究会形式で構想発表していただいた。このプロセス

も、本書の各章の配置やバランスを考える上でとても重要なことだった。

共編著という形式は、ひとりの編者だけで知恵を絞るよりもはるかに練られた案を考えることができる。すべての原稿が揃った後も、章の並びや部の構成、ワークシートなどの細部に渡って検討を続けた。多くの優秀な執筆者に恵まれ、幾度も検討プロセスを経て、最新の研究分野を初学者に示すことができる、良書をつくることができたものと自負している。

【本書の構成】

はしがき

序章 なぜメディアを研究するのか？

第Ⅰ部 プラットフォームから社会を見る

第1章 ネットは「みんなの声」を伝えているのか？

第2章 なぜフェイクニュースが生まれるのか？

第3章 スマートフォンは写真をどう変えたのか？

第4章 美容整形は個人的なことか？

第Ⅱ部 《home》からメディアを見る

第5章 ジェンダーCMはなぜ炎上しがち？

第6章 障害者は「がんばる人」なのか？

第7章 女性被害者は本当に多いのか？

第8章 健康の不安はメディアで解消されるのか？

第Ⅲ部 メディアで境界を越える

第9章 「外国人」選手はなぜ特別視されるのか？

第10章 クールジャパンって本当にクールなの？

第11章 K-POPは誰のものか？

第Ⅳ部 メディアで記録／記憶する

第12章 グーグルマップは世界を描いているのか？

第13章 メディア経験から何がわかるのか？

第14章 地域の記憶は誰のものか？

終章 「メディアスタディーズ」の現在とは？

ワークシート／索引

第Ⅰ部「プラットフォームから社会を見る」は、従来のマスメディアとは仕組みが異なるデジタルメディアの新たな性質——メディアの再帰性——をテーマにした。それらは新たな表現活動や社会運動などを生みだす一方で、従来のメディア研究ではとらえきれない現象やさまざまな社会問題を生み出している。

第Ⅱ部は「《home》からメディアを見る」。今日では《家庭》内でメディアに接する行為の中心にテレビがあり、世界中で共通する様式を持つ。テレビの置かれた場所＝《home》は、懐かしさや愛着などの感情と結びついているが、その外側を世界の外部として区別し不安を呼び起こすものでもある。

第Ⅲ部「メディアで境界を越える」は、メディアによって国境や人間の区別を「越境する」という営みに迫る。社会科学と人文科学の境界線を縫うように進むチャレンジングな問いが並んでいる。

第Ⅳ部「メディアで記録／記憶する」では、個人化・身体化したメディアを使って、人々がみずからの行動や実践を記録したり記憶したりすることをめぐる問いを置いている。

終章では、レポートの作成に役立つように、自らの「問い」を発見し、資料収集を行い、なんらかの分析や考察を加えて、レポートにまとめるまでのプロセスを概説した。

【刊行後の反響】

本書の刊行は、2020年4月であり、新型コロナウイルスの世界的大流行のただ中のことであった。本学を含む多くの教育機関が休校を余儀なくされ、前期授業開始が大幅に遅れたのちに、全面的に遠隔形式の授業となった。本書は、他大学でも教科書として採用され、好評を得ていたが、出版流通が滞っていたため、一時ではあるがAmazonで品切れ状態となり、中古書に高値が付くという状態となった。出版社と相談し、社会情勢に鑑みて、緊急に電子書籍としても発売されることになった（同年8月）。

今後もしばらくの間、遠隔授業が継続することも予想されている。2020年度の私の担当科目も遠隔で実施したが、本書の特徴は双方向型の学びを実践する上で大いに役立つと実感している。コロナ禍における人々の新しいライフスタイルを考える上でも、本書は格好の題材を提供してくれるだろう。

本学における授業機会、学生たちからのレスポンスから、本書のアイデアは生み出されました。改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(石田 佐恵子)